

論文内容の要旨

本論文の目的は、植民地政府によって導入されたインド系移民に着目し、彼らがフィジーでどのような社会関係を構築し、維持してきたかを明らかにすることによって、フィジーにおけるインド系住民の文化について考察することである。

フィジーは英国による植民地時代（1874～1970）を経験し、現在に至っている。フィジーの植民地統治は土着民保護を統治精神とするもので、植民地政府は首長の権威や社会構造、慣習を保護することに努め、土地の譲渡を禁止するなどした。一方、植民地財政の充足を図るために年期契約移民制度（Indentured System）により、1879年から1916年の間にインドから約6万人の移民を導入し、砂糖産業を活性化させた。

植民地化はフィジーにさまざまな影響をもたらしたが、最も大きな影響を与えたのは移民の導入であり、それは後のフィジー人口の民族構成を変えることになった。移民の約6割がフィジーへの残留を選択し、その子孫にあたるインド系住民は、現在のフィジー人口の40%前後を占めている。加えて、植民地政府が実施した土地政策は、土地の約90%をフィジー系父系出自集団に帰属する土着地として、売買を禁止した。この土地のあり方をめぐって土着民と非土着民という二つのカテゴリーが創出され、現在にいたっている。

近年、人類学研究では民族誌批判が盛んに展開されている。それは従来民族誌が、対象とする社会を外部のシステムと切り離し、その社会内部で完結した統合体として捉えてきたこと、従来民族誌が対象社会の歴史性に無頓着であったことに対する批判であり、自省である。フィジーの人類学研究でも、このような批判的な問題意識から、島嶼世界と西洋世界との関係をめぐる議論が盛んに行なわれてきた。だが、フィジーのインド系住民に着目し、彼らの日常的な生活やその社会、フィジー系住民との関係を問題にする研究はほとんどなかった。

対象社会を自己完結的な統合体として捉えることは、多くの場合、西洋世界をはじめとする外部システムとの関係や影響を視野の外において対象社会を描くことにつながる。しかし、フィジーの場合、状況はさらに複雑である。フィジー系住民社会の外部に、インド系住民社会が存在する。インド系社会を研究の視野から除外することは、フィジーの土着社会を自己完結的な統合体と捉え、閉ざされた社会として描くことを意味する。言い換えると、「フィジー人のフィジー」を描いてインド系住民を描かないならば、たとえ西洋世界の存在を考慮に入れたとしても、「二つの民族からなるフィジー」という植民地化に起因するフィジー特有の社会のあり方を等閑視することになる。

本論文は、今日の民族誌批判、とくに植民地主義をめぐる議論を意識的に受け止め、植民地経験がもたらした大きな変化としてインド系住民の存在に着目し、現在のフィジーにおける文化の動態を考察するものである。

本論文で対象とするのは、本島ヴィティ・レヴ（Viti Levu）島の西部、ナンディー・ディストリクト（Nadi District）の砂糖キビ栽培地域に位置するインド系の村落、Vセツルメントである。1910年代後半から移民契約が終了した人々が入植し始め、砂糖キビ栽培地域として開拓された、172世帯、780人（1999年12月当時）の村落である。

インドからの移民の多くは砂糖キビ栽培農業に携わり、これを生活の基盤とした。その過程で、彼らは土地との関わりを、フィジー系社会におけるのとは異なる意味で、重要な

ものと考えようになっていった。借地を継承する農家は、移民1世以来の農業を継承する者として、親族の核になった。そして砂糖キビの収穫と出荷の作業を共同で担うギャング(gang)という共同労働組織が、密接な社会関係を築いた。この関係は労働を目的としながらそれにとどまらず、人々の間に村という意識をも育てていった。今日では、農業に従事することもギャング組織も、インド系社会に独自の文化と捉えられている。

インド系移民の宗教や宗派、出身地域による母語や慣習などは、ほんらい多様であったのだが、プランテーションではそのような文化的な差異は考慮されず、社会的な機能を発揮することもなかった。しかし、移民制度が廃止され、インド系の人々の政治経済的な活動が活発になると、この多様性が表出してきた。とくにヒンドゥー教徒の間に、出身地に依拠する南北インド系のアイデンティティが覚醒し、セツルメントでも宗教的な組織が形成され、活動するようになった。だが、これがセツルメントの共同体性と抵触することはなく、バランスが維持された。ギャングを中心にした人々の共同体としての意識、それを基盤とした村としての意識が育っていることを、ここに読み取ることができる。

ところがごく最近になって、インド系住民のセツルメントに、新たな状況が生まれている。土着地の借地契約の更新を、フィジー系親族集団が拒否する事態がしばしば起こり、フィジー系住民が農家としてセツルメントに参入するという例も起こった。フィジー系住民が、セツルメントを彼らの村落と併置し、都市や町とならぶ居住地の一選択肢としてとらえるようになってきている。土地問題をきっかけに、それぞれの社会内部にあった軋轢が顕在化し、これまでインド系住民の文化を育ててきた空間が、大きな変化の波にさらされているのである。

今日、インド系住民とフィジー系住民は、セツルメントにおける直接的な相互関係を介して、現在生じている事象をそれぞれの文化に照らし合せて解釈し、対応している。例えば、農業活動に積極的なフィジー系住民を、インド系住民はインド系の文化を尊重する者として受け入れるが、一方のフィジー系住民にとってみれば、セツルメントと農業活動への参画を裏打ちするのは「近代」への強い意識である。土地問題を契機としてセツルメントで対面したインド系とフィジー系の住民は、文化をめぐってさまざまなやり取りを行っているのであり、この文化のダイナミズムが、とりもなおさずフィジーの植民地主義の文化の現代的位相である。

論文の審査結果の要旨

本論文は、フィジーのインド系住民の村を対象とし、植民地経験を経た移民社会の文化を論じた民族誌研究である。現在インド系住民はフィジー人口の半分近くを占めるが、インド系住民が生活する村（セツルメント）の社会や文化について、これまでまとまった研究はなされてこなかった。本研究はこの分野における嚆矢ともいえる研究であり、きわめて重要な意味をもつ。

フィジーのインド系住民のほとんどは、英国植民地政府が、砂糖キビ・プランテーションの労働力として19世紀末から20世紀はじめにかけて導入した年期契約移民の子孫にあたる。土着民保護の植民地政策によって、土地はフィジー系住民の父系出自集団に帰属するため、インド系住民は借地によって砂糖キビ栽培の農地や住宅地などを入手し、現在にいたっている。このようなフィジーの植民地経験をふまえたとき、フィジー研究にインド系住民の研究は不可欠だといえよう。フィジーについては、植民地主義に関わる重要な研究がいくつも提出されているが、いずれもフィジー系住民と西欧世界の関係を中心にとりあげて、インド系住民は視野の外におかれていた。本研究は、この研究領域を開拓したものとして位置づけられる。

本論文は6章から構成される。序章と終章を除く4つの章にわたって、調査対象としたインド系住民のセツルメントを、順に4つの側面から光をあてて描き出す。第2章では、家族世帯に焦点をあてて、世代交代過程と借地の関係を記述することで、インド系住民にとって農家であることの意味や、借地の重要性を明らかにする。第3章では、砂糖キビ栽培に焦点をあてて、セツルメントが砂糖産業の最底辺を支えていることを描く。そこで注目されるのはギャングと呼ばれる共同労働組織で、それがセツルメントの人間関係を構成する重要な機能を果たしていることを詳細に描き出す。第4章では、インド系団体の活動に焦点をあてて、インド系住民の出身地である南北インドの地域性が、どのようにセツルメントに現れているか描き出す。第5章では、借地契約更新をめぐる問題に焦点をあてて、セツルメントの構成や生業基盤に生じている新しい変化を明らかにする。

以上の構成をもつ本論文は、冒頭にも述べたように、フィジーのインド系住民のセツルメントを、はじめて綿密に調査し記述した民族誌研究として、高く評価される。フィジーのインド系住民の社会をセツルメントの生活レベルでとらえた研究は、日本はもちろんのこと、国際学会のレベルにおいても最初のものであり、その意味はきわめて大きい。とくにギャング組織の形成と分裂の過程、住民関係のなかでもつ意味を明らかにしたこと、宗教的な組織としてのマンガリが文化活動（音楽や叙事詩）の集まりでもあって、構成員以外の者を含めた親密性を醸成しているという指摘、などは貴重である。さらに本論文は、インド系移民研究にも重要な貢献をしている。世界のさまざまな地に散らばり生活するインド系移民を対象とした民族誌的研究は少ない。長期にわたる調査に基づいて記述された本研究は、今後の発展が期待されるこの研究分野に、先導的貢献をなすものである。

一方、本論文が抱える課題として、「伝統」「近代」「村」といった分析概念について、さらにふみこんだ議論がほしかったこと、砂糖産業が本論文の大きな軸になっているにもかかわらず、その全体像がみえないこと、先行研究についてもう少し本論文にひきつけた議論がほしかったこと、があげられる。

このような問題点は指摘されるものの、本論文で提示されたデータは、質・量ともに貴重なもので、高い学術的意義を有している。フィジー系およびインド系社会についての、今後のさらなる研究の展開を期待させるものであり、審査員全員一致して、学位の授与に価すると判断した。